

基調講演

『作業療法士とクライアントをつなぐ作業療法カウンセリング』

講師：大嶋 伸雄

(首都大学東京大学院人間健康科学研究科)

われわれの役割は端的に言うと、分野を問わずに対象者の「できる事」を増やし、主体的で意味のある作業（生活）を獲得してもらうことにある。活動を通じて対象者の自助を促進し、生まれてきて良かったと誰もが言える状態を創ることにある。そして活動とは、われわれ作業療法士が行う事ではなく、対象者が自ら動かなくてはならない。徒手療法や物理療法で理学療法士が患者を動かす理学療法とは異なる。

ここで皆さんに問いたい。「一体どうやって患者（クライアント）さんに動いてもらうのか?」「どう説明して主体的に活動を行ってもらうのか?」「どこでその為の教育を受けたのか?」

まさしく今、日本の作業療法教育では、ここが長い間欠落していたのである。活動の効果、作業（生活）の意味と意義や、理論から概念までたたき込まれる養成過程で、作業療法での具体的なアプローチ方法、心と身体をみる作業療法の効果を把握できる具体的な評価と検証方法を学ぶ必要がある。そして、日本人に作業療法を提供するためには、「対象者の主体性とやりたい作業（生活）を引き出し、作業療法士と活動へと結びつけるための具体的な技法」が必要なのである。そして日本の作業療法に必要な技法とは明らかに、「心理学とその応用的技法」である。そうした、根拠ある心理的技法を作業療法に加え、医学モデルのスキーマから作業療法士が自らを解き放ち、「心と身体の両方をみる作業療法」を蘇生させる事で、われわれは本物の作業療法を提供できるはずである。作業療法士とは生活と活動の専門家であり、半分、心理士でもある。

日本の作業療法にこうしたカウンセリング技法を取り入れる事の意味と意義であるが、日常的に主体性を発揮できず、自分の人生における意味ある作業（生活）を意識できにくい日本人に対し、作業療法がもつ有効な「作業」の効果を存分に活かすためである。「作業療法カウンセリング」に代表される、こうした心理的技法の数々は、やがて対象者の意欲や、意味ある作業（生活）への気づきをもたらす事を可能とし従来とは全く異なる成果をもたらす。その結果、作業療法士のアイデンティティを育み、養成課程においても作業療法の具体的なアプローチ、心と身体をみる作業療法の具体的な評価と検証方法を教育に反映させることが可能となる。そうした改革の機運は、もうすでにそこまで来ている。